

フィンランドにおける SISU 概念の体験的調査

—文化的背景と日常実践の観察を通じて—

序論

本調査では、フィンランドにおいて重視されてきた精神概念「SISU」が、文化的背景の中でどのように形成されてきたかを調査し、日本の思想における「道」の概念の形成と比較することを目的とした。これは、「異なる文化を土壌とした哲学の発展体系の比較」という卒業論文の基礎的調査として位置づけられる。

本調査では、SISU を理論的に理解するだけでなく、自然体験や身体活動を通してその精神を五感で体得し、主観的側面からも記述することを重視した。このアプローチは、現在の SISU 研究が理論的、統計的な面にばかり傾倒している中、これまで日本の「道」が体験を通して岡村昭彦や内田樹などによって研究され、発信されてきたように、個人的体験と学術的探究を架橋するものであり、卒業論文で取り組む「異なる文化を土壌とした哲学の発展体系の比較」研究の第一歩とする試みでもある。

調査期間中、私はヌークシオ国立公園でのキャンプ、ヘルシンキマラソンへの参加、複数のサウナ施設の利用、そして美術館・博物館での文化的考察を行った。これらの体験を通じて、SISU という概念が単なる理論的概念ではなく、フィンランド人の日常生活の中で生きて実践されている精神性であることを発見した。以下、各体験における観察と考察を詳述する。

第一章: キャンプ体験と SISU の個人的側面



写真上 遠くから見た幕営地

写真下 幕営地から見た日の入り

1.1 ヌークシオ国立公園での幕営泊

電車とバスを乗り継いでヌークシオ国立公園の入口まで向かい、キャンプ地を目指して長距離をゆっくりと歩いた。決して計画通りの順調なキャンプと幕営泊とは言えなかった。しかし、総じて非常に意義のある充実したものであり、この調査で一番鮮明に記憶に残る濃い時間になったことは間違いない。

そもそも、SISU を考えるうえでキャンプに言及している論文や書籍は多くない。しかし、異国の地で、人が少なく、一人で行う幕営泊というのは SISU の概念を私自身が体感することによって一番効果的なイベントであったと調査後の今の私は言うことができる。SISU における一人の時間というものは、SISU を規定する「忍耐」、「やり抜く力」などという概念を SISU に馴染みのない者には、より鮮明に明確にするものであるということが言えるということも体感することができた。

1.2 孤独と SISU の関係性

これは、必ずしも一人の時間でなければ SISU の精神が現れてこないと言っているわけではなく、一人の時間を持つことが SISU という翻訳不可能な異国の概念を徹底的に考えて、感じるということを少し簡単にするという程度のことだ。しかし、これは最初のステップであり、いわば SISU の入口を探し当てるような作業であり、実際に入口を入った後の冒険は決して一人である必要はないはずだ。

むしろ SISU が少数のフィンランド人が大量のロシア兵と戦うという状態で象徴的に涵養されたように、隣の軍人と命をかけながらの固い絆のもとでもこの概念が持続していくことは勿論、発展していくということも忘れてはならないと感じた。ここでいう発展とは、物理的に近くに友達や恋人など知っている人が居る中でも、孤立感と強い自我を保ちながら自分と向き合い、周りの人間に惑わされることない強い自我を発揮するということである。

これはいわば、強い自我を築きやすい一人の状態を他人の邪魔や誘惑から保てる可否かという問題であり、この発展段階において戦場で生まれた原初の SISU に到達できるのだろうと感じた。

1.3 戦争の物語としての SISU

しかし、この考えはある一方を見逃しているようにも感じる。私は今回の訪問で、現在の多くのフィンランド人が SISU のルーツだとしているロシアとフィンランドの戦争の際のフィンランド人の振る舞いや精神的状態はたしかに“SISU”という概念として記述されるという意味ではルーツであると感じたが、一方で戦場という特異な場が強制的に人々に作り上げさせた一つの物語であると感じた。

フィンランドの冬は長く、厳しいほどに寒い。また、昼の時間が極端に長かったり短かったりする。そして、両隣にはスウェーデンとロシアという国土、人口、軍事力、経済力などにおいて自国よりも大きな国々がある。このような自然や政治の状況において、なにか自分たちがまとまれるようなアイコンのような象徴的な存在や概念を切望していたフィンランド人たちに戦場の兵士という存在がそのアイコンの鋳型にちょうどはまるようなものであったのではないかと考えるさせられる。

SISU の意味が「忍耐」、「やり抜く力」という一人の時間や思考にフォーカスしていると考えれば、フィンランド人をまとめ上げるための概念にこれを使用するということは「一人一人の独立が団結を生む」というような矛盾の響きを持った表現をしなければならなくなる。しかし、隣の人が自分と同じように苦しみ、努力しているということが暗にでも分かった気になっていれば、感情論としては他人との団結を感じられるということはいかなる矛盾の響きをも持たないだろう。

つまりは、感情としての団結というものが戦争の厳しかった当時のフィンランド情勢において作られた SISU の実体であり、もともとの SISU の土壌としてオリジナルな「忍耐」、「やり抜く力」などの性格を一国団結のために戦略的に物語として喧伝する形になったのだらうと考えることもできるということだ。

1.4 説明と実践の乖離

実際、インタビューしたすべての人が SISU を説明する際にロシアとの戦争における兵士の例を挙げて説明し、学校教育では SISU への言及が少ないか殆ど無いという状況においても人々の SISU の実践としては様々な方法を語ってくれた。このことから、個人に根付く SISU の種々に富んだ実践と SISU 概念に対する具体的な説明の少なさや思想的な情報量の少なさとの間に隔たりを感じざるを得なかった。

この観察は重要な示唆を含んでいる。SISU は明文化された教義や体系的な思想としてではなく、生活実践の中で暗黙知として継承されている概念である可能性が高い。戦争において発展した物語は、この暗黙知を言語化し、共有可能にするための「説明装置」として機能しているのではないだろうか。

第二章: マラソン体験と集団性の逆説



写真上 スタート直前

写真下 ヘルシンキマラソンのゼッケン

2.1 参加形態の観察

マラソンにランナーとして参加したことで多くのランナーに直接お話を聞くことができたことは非常に有意義であった。参加者の参加形態としては、集団で参加する人は殆どおらず、一人で参加していた。東京マラソンのように応募しても抽選当選しないことが殆どであるような倍率の高いマラソンではないにもかかわらず、一人で参加していた人が大多数であったことは印象的だった。そして、集団で参加する場合は家族で参加しているケースが殆どだった。

これに関しては、現地の人との会話の中でマラソンは一人で走るか、家族で走るかわからないということが話題になったことから現地のマラソン文化としてそういったものがあるということがわかった。

2.2 動機の二項対立と語り口の一致

また、その理由について聞いてみると一人で走ることは説明の必要がないということを楽しみながら言われ、家族参加について言えば家族の unity を高めたいということ言っていた。これを聞いたとき、そういった答えが返ってくるということはある程度予想していたが、いざ現地の人に言われてみると少しひっかかる違和感のようなものがあった。

この違和感というのは、一人でマラソンに参加する理由が自己への挑戦という SISU を象徴するような動機としてあり、家族でマラソンに参加することは家族間の unity を高めるためであると捉えるとき、前者は自己に動機を求め、後者は自己の外に動機を求めるという分かりやすい二項対立的な図式として感じられる一方で、家族参加している人も個人参加している人にしても、同じ熱量でフィンランド人独特のさっぱりした蛋白な口ぶりで淡々と語っていることに對するものだった。

普通、対立するような動機でなにかをするときには、その口ぶりや雰囲気にも対立とまでは言わずともある程度の違いが感じられるようだと思ったからこそその違和感であるのだが、上にも書いたようにフィンランド人と喋るときに感じる彼らの独特な会話の特徴によって対立する立場でも、物の言い方が似るのかもしれないと思い、違和感を残しながらもマラソンを走り終えた高揚感と疲労感が相まってその時はその違和感を消化することへと発展しなかった。

2.3 淡々とした語り口の意味

この「淡々とした」語り口こそが、実は SISU の重要な表現形式なのではないかという仮説が後の体験を通じて強化されることになる。強い感情や深い動機を持ちながらも、それを誇張せず抑制的に語るという態度そのものが、SISU における「自制」の現れである可能性がある。感情の抑制は弱さではなく、むしろ内面の強さの表現として機能しているのかもしれない。

第三章:サウナ体験と文化の能動的守護



写真上 ヘルシンキ最古のサウナの脱衣所

写真下 タンペレにある公衆サウナに隣接する湖

3.1 施設構造と自由なスペース

サウナは一室しかなく、日本のように多種多様なサウナが一つの施設に入っているということではなかった。フィンランド滞在中、数多くのサウナに行くことになるが、サウナ施設一つに一つのサウナという場合が多い。また、地元密着型のサウナであればほぼ全てがそうであるということに気づく。

その他の設備としては、外気浴ができるスペースには椅子や長椅子が置いてあるだけでなく、座ることもでき、寝ることもできる床のスペースがあった。この床のスペースはとても印象的なものであった。役割がはじめから与えられていないからこそ、自由にくつろげるスペースというものがそれぞれの人が個性を表出する場所としてある。これは、フィンランドの学校教育の中でも見られる。例えば、多種多様な椅子。授業を受けるうえで、椅子が決まり切った形でなくてもいいというわけだ。

また、サウナの直後には湖に直結する形で遊泳することもできる。多くのフィンランド人はサウナの直後には湖に入り少しばかり遊泳した後、外気浴のスペースで友人や恋人と語らい合っていた。

3.2 観光地サウナでの出来事

印象的な出来事が起きたのは、いわゆる観光地としてのサウナ施設という趣が強い場所であった。この場所は水着を着用して男女が一緒にすべての場所を共有するスタイルであった。ここでは観光客が多いため日本人の方も数多くいたが、ヨーロッパの各地から人が集まっていた。

そして、私が印象的だった場面があったのだが、それはフィンランド人が大きな声で話している観光客を注意するというものであった。注意する前には、私の前に座っていた人が大きな声で話していたのだが、その隣りにいたフィンランド人が大きな声で話している人を気にしているのだろうと私は推測しながらそのフィンランド人の顔を見ると、フィンランド人の彼と目が合った。

その時にそのフィンランド人が気がかりなのは大きな声で話している観光客ではなく、フィンランドのサウナを満喫している観光客としての私なのだとすることを直観した。つまり、彼は自分の国の誇るべき文化を外国からはるばる来た観光客にしっかりと感じてほしいという思いがあるのだろうということを直観した。

3.3 雰囲気的重要性

注意を受けた観光客は謝罪の意をボディランゲージで示しその場は終わったが、私はやはりどういった気持ちであのフィンランド人が注意をしたのかということをも本人に確かめなくては気が静まらないような心持ちだった。なので、その後に外気浴をしている彼の近くについて軽い挨拶を交わし数分程度話した後に、聞きたいことを聞いてみた。

すると、彼はサウナを楽しむ上での雰囲気的重要性について言及し始めた。彼はそれぞれの場所のサウナごとに、そして同じ場所でも時間帯ごとに別々のサウナがあるのだと言う。たしかに、彼が注意した、あの場所のあの時のサウナはそれぞれの人が下を向いたり、上を向いたり、正面を向いて目を閉じていたり、それぞれの人が自分の時間を楽しむという雰囲気であった。だからこそ、大きな声で話していた人がういってしまった様な形になったのだ。つまり彼はみんなが話しながら入るような場面であればそれがその時のサウナの雰囲気として楽しむということを言いたいのだ。

これは、空気を読むということを普段から実践している日本人としての私としても非常に納得する説明であったが、空気を読まない人を注意するということをするかしないかの違いは大きいと感じたので、重ねて私ならば注意まではできないだろうということをも正直に伝えてみた。

3.4 文化の押し付けと誇り

この質問において私は、私のような観光客に見えるような人にフィンランドのサウナを誤って捉えてほしくないのではないかと上記の予想を裏付けるような返答を期待していた部分はあった。しかし、彼が言ったことは雰囲気を読むというフィンランドのサウナの文化を大きな声で話していた当人たちにも理解してほしいというどこまでもサウナへの誇りが感じられる期待以上のものであった。

自分の誇る文化を半ば強制的に他国の人に押し付けるほど強い文化意識はその文化の成立過程がいかに過酷であり厳しいものであったのかを示す証左として十分だと感じた。

3.5 SISU の能動的側面の発見

このサウナでの体験は、SISU に関する私の理解を大きく変容させた。これまでの考察で浮かび上がっていた SISU は、どちらかといえば「内向的」「個人的」「忍耐」といった受動的な側面が強調されていた。しかしサウナの場面は、SISU のもう一つの側面を明らかにしている。

それは、自文化への誇りと、それを守るための能動的な行動である。集団の雰囲気
を維持するための積極的な介入。「我慢する」だけでなく、「正す」という行為。SISU は
単に逆境に耐える受動的な力ではなく、大切なものを守り抜くための能動的な力でも
あるのだ。

第四章:美術・建築にみる SISU の創造的昇華



4.1 アテネウム美術館での発見

ヘルシンキのアテネウム美術館、デザインミュージアム、建築ミュージアム、現代美術館、タンペレのムーミンミュージアムなど種々のアート展示に触れた。アテネウム美術館では、主にフランスとフィンランドの絵画の好対照を見ることができた。

アテネウム美術館で見たフランス絵画とフィンランド絵画の対比は、SISU の芸術における表れを象徴的に示していた。フランス印象派の影響を受けながらも、フィンランドの画家たちは独自の表現を追求した。彼らは国際的な芸術潮流を学びつつ、フィンランドの自然、光、そして民族的アイデンティティを作品に刻み込んだ。これは文化的周縁に位置しながらも、模倣ではなく独創性を貫く姿勢であり、まさに SISU の精神である。

19 世紀末から 20 世紀初頭のフィンランド絵画には、ナショナル・ロマンティズムという独自の芸術運動が見られるが、これは政治的独立以前に文化的独立を達成しようとする意志の表れでもあった。

4.2 アルヴァ・アアルトの建築思想

デザインミュージアムと建築ミュージアムでは、フィンランドを代表する建築家、デザイナーのアルヴァ・アアルトの数多くの展示と彼に関する記述を見ることができた。加えて、フィンランドを代表する世界的メーカーで日本でも絶大の人気を誇るマリメッコについての展示も見ることができた。

デザインミュージアムと建築ミュージアムで特に印象的だったのは、アルヴァ・アアルトの作品群である。アアルトは国際的なモダニズム運動の中で、フィンランドの伝統と自然素材への深い理解を融合させた。彼の曲線的な木製家具や波打つガラス器は、機能主義の合理性と人間的温かみを両立させている。厳しい気候条件の中で育まれた実用性への追求と、北欧の自然に対する深い敬意が、世界的に評価されるデザインを生み出したのである。

4.3 マリメッコと色彩の爆発

マリメッコの展示もまた、SISU の別の側面を示していた。第二次世界大戦後の困難な時代に創業されたマリメッコは、大胆な色彩とパターンで世界を魅了した。戦後の物資不足と社会的制約という逆境の中で、むしろ色彩の爆発という創造的解答を提示したのである。伝統的なテキスタイルデザインの枠を打ち破る勇氣と、フィンランドの自然からインスピレーションを得た有機的なパターンは、困難を創造性に転換する SISU の本質を体現している。

4.4 トーベ・ヤンソンとムーミンの世界

ムーミンミュージアムではムーミンというキャラクターが生まれた過程から作者についての記述、作者が生きた時代背景の詳しい記述など、ムーミンのストーリーに関わる展示以外にも非常に豊富であった。

ムーミンミュージアムでは、作者トーベ・ヤンソンの生涯と作品世界を深く知ることができた。ヤンソンは初め、政治的な意見、主張を大衆により広く行うために女性芸術家として活動を開始したという事実もムーミンの物語しか知らない私にとっては驚いた点であった。

また、ムーミンの物語には、孤独、喪失、自然災害といった困難が繰り返し登場するが、登場人物たちは勇気と思いやりをもってそれらに向き合う。展示では、ヤンソンが創作活動を通じて時代の不安や個人的苦悩と対峙した過程が詳しく記述されており、彼女自身が SISU を生きた人物であることが理解できた。しかし、ミュージアムにおいては彼女及び作品と SISU を結びつけるような記述などはなかった。

4.5 逆境を創造の糧とする力

これら四つのミュージアムを通じて見えてきたのは、SISU が単なる精神論ではなく、具体的な文化的創造性として結実しているという事実である。フィンランドの芸術家、デザイナー、作家たちは、地理的周縁性、歴史的困難、厳しい自然環境という制約を、独自性の源泉に転換してきた。彼らは国際的潮流を学びながらも模倣に甘んじず、実用性を追求しながらも美を犠牲にせず、困難を語りながらも希望を失わなかった。

SISU とは、逆境に耐える力であると同時に、逆境を創造の糧とする力であるということがこれらの芸術家たちの作品を見ていると感じられてくる。

第五章:日常空間に生きる SISU—建築と公共性



写真上 SISU を象徴する百貨店の建築

写真下 SISU を象徴するヘルシンキ中央駅の建築

5.1 Oodi 図書館の生命力

国立図書館や公園などのそれ以外の日常においても、公共物が生きているということ強く感じた。日本においては万博の際の建築物やイベントごとにおける公共物というのは大規模なものを多額のお金をかけられるが、果たして生きていると言えるだろうか。

例えばフィンランドの Oodi 図書館。これはまさしく生き物であった。そこに集う人々は目的を持った人もあれば、そうでない人もある。本が蔵書されているだけでなく、チェスや囲碁、双六、その他のあらゆるボードゲームに加えて、最新ゲーム機ができるルームがあったり、最先端の 3D プリンターや工作機械を使って工作物を作成することもできる。

この多機能性は、サウナの外気浴スペースで見た「役割がはじめてから与えられていない自由なスペース」という発想と共通している。フィンランドの公共空間には、人々が自由に自分の時間を過ごせる余白が意図的に設計されているのだ。

5.2 建築様式としての SISU

バスツアーでは SISU に関する言及があった。建築物の装飾が SISU を表しているという内容であった。この言及は当初、抽象的に感じられたが、調査を通じて次第にその意味が明確になってきた。

一方で日本の武士道における建築物への影響はどうであろうか。こちらは武家屋敷や茶室、書院など伝統的家屋に色濃くはっきりと見ることができる。つまり、主には文化財として保存される形である。その点、SISU の建築はヘルシンキの街の至る所で発見できる。庶民の多くがよく使うスーパーマーケット、雑貨店が入った建物なども SISU の建築様式が採用されている。そして、ヘルシンキの中心的存在であるヘルシンキ中央駅もまさしく SISU の建築様式がとことん採用されている。

5.3 武士道との比較から見えるもの

これは、武士道が守るべき規範というような保守的な概念を包摂しているのに対して、SISU の方では創造力を現在進行形で発揮し続けることを求める概念であるという違いを示しているのではないだろうか。

武士道が特定の階級の倫理体系として成立し、「いかに生きるべきか」という様式美を追求したのに対し、SISU は全ての人に開かれた「いかに生き延びるか」という実用

性と結びついた概念である。武家屋敷や茶室の簡素な美しさは、精神修養のための意図的な設えであり、その使用者も限定されていた。一方、フィンランドの建築における簡素さは、厳しい気候と限られた資源という制約から生まれた必然であり、その制約の中で最大限の機能性と美を両立させようとする創造性の結果なのだ。

武士道が「過去の理想を現在に保存する」という時間軸を持つのに対し、SISU は「過去の困難を現在の創造に転換し、未来へ向かう」という時間軸を持つ。だからこそ、武士道の建築は文化財として保護され、限られた場所で過去の姿を留める一方で、SISU の建築は日常の中に生き続け、ヘルシンキ中央駅やスーパーマーケットという現代の庶民が毎日使う民主的な空間にまで浸透している。SISU が「誰もが持ちうる力」として語られることと、その建築様式が庶民の日常空間に遍在していることは、同じ民主性の表れなのだろう。この違いは、両概念の本質的な性格の差異を建築という具体的な形で示していると言える。

第六章:総合考察—SISU の多層的構造

6.1 三つの層としての SISU

本調査を通じて、SISU には少なくとも三つの層が存在することが明らかになった。

第一層は、**個人的実践としての SISU** である。一人でのキャンプ、一人でのマラソン参加に象徴されるように、これは「忍耐」「やり抜く力」という内面的な資質として個々人の中に存在する。この層は、言語化が難しく、体験を通じて理解される暗黙知的な性格を持つ。実際、インタビューした人々は自分なりの SISU の実践方法を持っていながら、それを明確に説明することには困難を感じていた。

第二層は、**集団的象徴としての SISU** である。これはロシアとの冬の戦争におけるフィンランド兵の物語として語られ、国民的アイデンティティの基盤となっている。厳しい自然環境、大国に挟まれた地政学的状況という困難な条件の中で、フィンランド人が自分たちをまとめ上げるために必要としたアイコンとして機能している。この層は、第一層の個人的実践を説明し、共有可能にするための「物語装置」として働いている。

第三層は、**文化的創造としての SISU** である。アルヴァ・アアルト、マリメッコ、トーベ・ヤンソンといった芸術家たちの作品に見られるように、これは逆境を創造性の源泉に転換する力として表れる。地理的周縁性や資源の制約といった困難が、独自性と革新性を生み出す原動力となっている。この層において、SISU は単なる精神性を超えて、具体的な文化的成果として結実する。

6.2 暗黙知としての SISU

本調査で繰り返し観察されたのは、SISU の「説明」と「実践」の間の乖離である。人々は戦争の物語を用いて SISU を説明するが、実際の実践は極めて多様であり、必ずしも戦争の文脈と直接的には結びついていない。学校教育では SISU への明示的な言及が少ないにもかかわらず、人々は SISU を生きている。

これは、SISU が明文化された教義や体系的な思想としてではなく、生活実践の中で暗黙知として継承されている概念であることを示唆している。日本の「道」の概念が、型の稽古や師弟関係を通じて身体知として伝達されるように、SISU もまた言語を超えた次元で伝承されているのではないだろうか。

戦争という物語は、この伝達不可能な暗黙知を何とか言語化し、共有可能にしようとする試みとして理解できる。しかし本質的には、SISU は体験を通じてしか真に理解できない概念なのだろう。

6.3 民主性と日常性

SISU と武士道の比較から浮かび上がったもう一つの重要な特徴は、SISU の民主性と日常性である。武士道が特定の階級に属する倫理体系であり、その建築も文化財として保存される非日常的な空間に留まるのに対し、SISU は全ての人に開かれた概念であり、その精神は日常空間に遍在している。

ヘルシンキ中央駅、スーパーマーケット、Oodi 図書館といった庶民が毎日使う空間に SISU の建築様式が採用されていることは、この民主性を象徴している。SISU は特別な場所や特別な時間のためのものではなく、日常の中で常に実践され、更新され続ける「生きた概念」なのである。

6.4 時間軸の違い

武士道が「過去の理想を現在に保存する」という後ろ向きの時間軸を持つのに対し、SISU は「過去の困難を現在の創造に転換し、未来へ向かう」という前向きの時間軸を持つ。この違いは、両概念の性格を決定的に分かつ。

武士道は「いかに生きるべきか」という規範を提示するが、SISU は「いかに生き延びるか」という実践を求める。前者が理想追求の精神であるのに対し、後者は生存と創造の精神である。この違いが、保存される文化財としての建築と、日常に生きる建築との違いを生み出している。

第七章:結論と今後の課題

7.1 調査の成果

本調査では、当初の目的であった「SISU という概念を体験的に理解する」ことを、多様な実践の場を通じて達成することができた。キャンプ、マラソン、サウナ、美術館という異なる文脈での観察を通じて、SISU の多層的な構造が明らかになった。

特に重要な発見は以下の三点である。

第一に、SISU は単一の定義に還元できない多層的な概念であるということ。個人的実践、集団的象徴、文化的創造という三つの層がある。

第二に、SISU は暗黙知として継承される概念であり、その「説明」と「実践」の間には構造的な乖離が存在するということ。戦争の物語は説明装置として機能しているが、実際の実践はそれよりも遥かに多様で豊かである。

第三に、SISU は受動的な耐える力であると同時に、能動的な守る力であり、さらには創造的な力でもあるということ。サウナでの文化守護の場面や、芸術家たちの作品は、この多面性を如実に示している。

7.2 武士道との比較から見た視座

日本の「道」の概念、特に武士道との比較を通じて、SISU の特徴がより鮮明になった。両者はともに困難な歴史的状況の中で形成された精神概念であるが、その性格は大きく異なる。

武士道が階級的、保守的、規範的であるのに対し、SISU は民主的、革新的、実践的である。武士道が「いかに生きるべきか」を問うのに対し、SISU は「いかに生き延びるか」を問う。武士道が過去の理想を保存しようとするのに対し、SISU は過去の困難を未来の創造に転換しようとする。

この対比は、「異なる文化を土壌とした哲学の発展体系の比較」という卒業論文のテーマに対して、重要な視座を提供する。同じように困難な状況から生まれた精神概念であっても、その社会構造、自然環境、歴史的文脈の違いによって、全く異なる性格を持つ概念が形成されるのである。

7.3 体験的アプローチの意義

本調査では、理論的研究に偏りがちな既存の SISU 研究に対して、体験的アプローチを採用した。この方法論は、概念の暗黙知的側面を理解する上で極めて有効であった。

一人でのキャンプを通じて「孤独の中での自我の強化」を体感し、マラソンを通じて「淡々とした語り口の背後にある強い意志」を観察し、サウナを通じて「文化を守る能動性」に触れ、美術館を通じて「逆境を創造に転換する力」を確認した。これらの体験がなければ、SISU の多層性や矛盾の統合という本質的特徴を理解することは困難だっただろう。

岡村昭彦や内田樹が日本の「道」を体験を通じて研究し発信してきたように、本調査も個人的体験と学術的探究を架橋する試みとして位置づけられる。概念の理解には、統計や理論だけでなく、身体を通じた体得が不可欠なのである。

7.4 残された課題と今後の展望

しかし、本調査には限界もある。調査期間の制約から、より深い参与観察や長期的な関係構築は実現できなかった。また、インタビューの対象も限定的であり、より広範な社会層や地域での調査が必要である。

特に以下の点については、今後さらなる研究が必要である。

第一に、SISU の世代間継承のメカニズム。学校教育で明示的に教えられないにもかかわらず、なぜ SISU は世代を超えて継承されるのか。家族、地域社会、日常実践の中でどのように伝達されているのか。

第二に、SISU とフィンランドの社会制度との関係。高福祉社会として知られるフィンランドにおいて、個人の「やり抜く力」を重視する SISU はどのように機能しているのか。この一見矛盾する関係をどう理解すべきか。

第三に、現代社会における SISU の変容。グローバル化、都市化が進む中で、SISU はどのように変化しているのか。若い世代の SISU 理解は、戦争を経験した世代とどう異なるのか。

第四に、他の北欧諸国との比較。スウェーデンの「lagom」、デンマークの「hygge」、ノルウェーの「friluftsliv」といった類似の概念と SISU はどのように異なり、どのように関連しているのか。

7.5 卒業論文への展望

本調査は、「異なる文化を土壌とした哲学の発展体系の比較」という卒業論文のための基礎的調査として位置づけられる。今回の調査を通じて、以下の研究の方向性が見えてきた。

まず、精神概念の多層性に注目する必要がある。SISU が示したように、一つの概念は個人的実践、集団的象徴、文化的創造という複数の層を持ち、それらが相互に関連しながらも独立して機能している。日本の「道」についても、同様の多層的分析が可能ではないだろうか。

次に、暗黙知と明示知の関係に焦点を当てるべきである。概念の「説明」と「実践」の乖離は、SISU に固有のものではなく、文化的に継承される精神概念一般に見られる特徴かもしれない。この乖離がどのように機能し、概念の継承にどのような役割を果たしているのかを解明する必要がある。

さらに、社会構造と精神概念の相関関係を探究すべきである。武士道と SISU の比較が示したように、階級社会と平等社会、農耕社会と狩猟採集社会といった社会構造の違いが、精神概念の性格を決定的に規定している可能性がある。

最後に、時間意識の違いに注目すべきである。「過去を保存する」概念と「過去を転換する」概念という対比は、文化の時間軸の違いを反映している。この時間意識の差異が、建築、芸術、日常実践にどのように表れるのかをさらに詳細に分析する必要がある。

7.6 最終的な考察

本調査の最も重要な発見は、SISU が「生きている概念」であるということだった。それは博物館に保存された過去の遺物ではなく、現在進行形で実践され、解釈され、更新され続けている動的な精神性である。

Oodi 図書館が「生き物」であったように、SISU もまた生命を持っている。それは固定された定義に収まることを拒み、多様な実践の形を取りながら、人々の日常の中で息

づいている。戦争という起源の物語を持ちながらも、その物語に縛られることなく、常に新しい意味を生成し続けている。

この「生きている」という性質こそが、SISU がフィンランドの現代社会において依然として重要な意味を持ち続けている理由なのだろう。それは過去の遺産ではなく、現在の資源であり、未来への指針なのである。

日本の「道」もまた、同様に「生きている概念」として捉え直すことができるかもしれない。武道、茶道、書道といった伝統的な形式の中だけでなく、現代日本人の日常実践の中に、形を変えて生き続けている「道」の精神があるのではないか。

卒業論文では、このような視点から、SISU と「道」の比較を深化させ、「異なる文化を土壌とした哲学の発展体系」の動的な性格を明らかにしていきたい。それは、過去 of 思想史研究ではなく、現在を生きる精神性の比較文化論となるだろう。